人文地名・田と畑と闘の巻 (1)

～水稲耕作は山田から始まった～

平田信芳

今回から「田畑」地名に取組む。田園風景を自然とみなす向きもあるが、地名を分析する立場からは田畑を自然現象に包括するわけにはいかない。表題を変えてイメージチェンジをはかることにする。

少年時代まで中国大陸で育ったために田のイメージ作りは容易ではなかった。学年が進むにつれて「青イタンボノソノ先ハ、ヒロイヒロイ海ダッタ」→「山田ノ中ノ一本足ノカカシ」→「豊葦原の千五百秋の瑞穂国」との知識を注入されたが、「山田とカカシ」の組合せ以外は容易に理解できなかった。カカシは畑でも見られたので、カカシと共に山田にも愛着を持てたからである。

地名カードを作る過程で「山田」という大字が数ヵ所あることに気付いた。これは例外的なことである。山田（鹿児島市・川内市・東郷町・川辺町・姶良町）、小山田（鹿児島市・加治木町）、内山田（隼人町）、細山田（串良町）などである。これらは歴史が古い地域との自負がその背景にうかがえる。

県内の「田」地名を立地の視点で分類すると、次のようになる。

①山田　207　②平田　189　③迫田　147
④池田　126　⑤原田　102　⑥窪田　90
⑦川原田　84　⑧浜田　76
⑨川田　39　⑩浦田　34　⑪野田　24
⑫石原田　23　⑬山口田　20　⑭野中田　18
⑮森田　14　⑯崎田　11　⑰島田　10
――以下省略。

これらは「地形地名十田」という形態であり、数の多い順に土地利用が進んだと考えられる。早く開けた所ほど人々が多く住み着き、地名も数的に増えるからである。

水稲耕作に欠かせないのは水の管理である。灌漑技術が幼稚な時代は山田が最も適している。山間の平地に開かれた山田は水が得易く、同時に落とし易い。平田は山裾の緩傾斜地にあり、山田に次いで開かれたと納得できる。それより下流域になるとシラス地帯では迫田が第3位にランクされるのは当然である。

人工的に「池」を造成して灌漑の水源とする時代になると池部・溝部・川辺などの土木技術を持った集団の活躍が必要になる。それは古墳時代以降と考えられる。池田に続く原田・窪田・川原田・浜田の段階になると、灌漑用水路だけでなく湿地の排水技術が必要になって来る。⑨川田以下の開田は①～⑧よりも時代が下るだろう。このように地名そのものに開発の歴史が秘められている。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (2)

～田植・稲刈は車田から～

平田信芳

国分小学校(舞鶴城跡)前の東西道路「イケンバア(池之馬場?)」を挟んだ一角は国分市中央二丁目と近代風な呼び名になったが、その昔は「ウエクイマダ(上車田)」と呼ばれていた。また下車田は消滅したが、中車田という小字もあった。どちらも四角形の区画に名付けられていた。

車輪はまるいのが生命であるから、車田のイメージは「まるい区画の田圃」になり易い。しかし円形区画の田圃には丸田や和田(輪田)の呼び名があるので、車田がしゃしゃり出て来なくても充分間に合っている。数的に見ても県内では車田(15例)・丸田(26例)・和田(85例)となる。方形区画の車田とは一体全体何物なのか。

まず地名カードから県内の地名例を掲げる。

車田(クルマダ)――出水市上鯖渕・高尾野町下水流・川内市宮里・市来町大里・伊集院町麦生田・吹上町永吉・鹿児島市原良(以上旧薩摩国)。蒲生町上久徳・姶良町平松・国分市上小川・福山町福山・牧園町万膳・輝北町諏訪原(以上旧大隅国)

小松車田――市来町大里

車畠――加世田市武田

車田は15例と少数ではあるが、重要な地域にあったことをそれぞれの地名は示唆している。『隼人文化第10』s57・2所収の論文、クライナー・ヨーゼフ「車田雑考」によると、アイスランド・ノルウェー・中部ドイツ・スイス・オーストリアなどの広い範囲に畑の作物や牧草を輪・渦巻・車形に刈り取る「車刈りの習慣」があるとのことである。さらにこの豊饒呪術的な習慣はヨーロッパだけでなく、マダカスカル島・インド・フィリピンにもあると記す。

ところで『地名用語語源辞典』は「周囲から螺線状に田植えを行う慣行は各地に存在するが、このような田植法を行なわなければならない田とは円形の田」と説明する。重大なことを見落している。四角形の田圃の中で円形に田植えをしたり稲刈りをすること自体に呪術的意味があったに違いない。恐らく古くから中国にあった「天円地方説」がからんでいると見られる。車田から田植えが始まり、稲刈りも車田から始まったに違いない。

鹿児島中央・国分中央・鹿屋中央などの命名が流行しているが、歴史抹殺の一面もある。国分の「車田」はその好例だろう。「車田」という地名の中にグローバルな研究テーマが秘められていたのである。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (3)

～餅田（もちだ・もちでん）～

平田信芳

神社の経費に当てたであろう宮田や神田については民俗学者の先行研究に拠らねばと考え、国史大辞典や民俗地名語彙辞典などをひもといて驚いた。宮田（みやだ）「神社の祭の経費などを賄う神聖な田。祭田・御供田・神田などともいう」と。これでは頼りにならず、初歩から調べ直さねばならない。切羽詰まった末、やがて正月の餅と再会することから「餅田」をテーマにすることにした。まず県内の「餅田」地名を列挙する。

もちだ（姶良町東餅田・西餅田は大字。他はすべて小字。姶良町上名・下名・寺師、東町山門野、長島町指江、頴娃町牧之内）

もちでん（隼人町朝日・松永・嘉例川）

青餅田（あおもっでん・国分市重久）

大餅田（だいにゅうでん・輝北町諏訪原）

ルビ未確認（川内市西手・田海・宮之城町平川・鶴田町神子、祁答院町黒木、川辺町下山田・清水・神殿、蒲生町久末、西之表市西之表）、黒餅田（加世田市津貫）。

これらの他に餅田の転化とみられる上持田（かみもちだ・高山町富山）、持田（宮之城町広瀬）がある。

上記の地名を地図上に記すと、①天降川流域（国分・隼人）・②別府川流域（帖佐）・③川内川中流域・④万之瀬川流域の4グループが目に付く、他はまばらな過疎的分布である。これら4グループの性格を考えると、①は大隅国府所在地近辺で最も古い。この地域に「もちでん」の呼び名が集中している。②は一時大隅国府が移転したと見られる帖佐の桑原国府と結び付くだろう。③は②の影響を受けた地域と判る。③と④の前後関係については決め手となるデーター不足。ルビ未確認がたたって来る。

此処に地名研究の難しさがある。もちだ・もちでん、土地の人々には小さい時から聞き慣れた地名であり、ルビなどなくても読めるのだが、地名の読みを集めるのはなかなかの仕事である。

国分市重久の青餅田は方言だは「あおもっでん」、市役所の台帳では「あおもちだ」。もちでん→もちだ、の推移とみられる。一般的には「訓読みが古く、音読みは新しい」とされるが、「もちでん」という湯桶読みはどうなるのか。難しい命題を抱え込んだようだ。

男が横杵を振りあげて餅を搗くようになったのは元禄の頃からで、それ以前は女が竪杵で餅を搗いていたという。最近は電気餅搗器の登場で餅搗き風景が見られなくなった。餅の搗き手をめぐる働き手の変化も目まぐるしい。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (4)

～粢田（しとぎでん）～

平田信芳

粢(しとぎ)は神前に供える楕円形の餅で火を通さないものだと、民俗学者の小野重朗先生(故人)から教えられた。国史大辞典によると本来はナマシトギだが、煮たニシトギや焼いたヤキシトギもあるようだ。鹿児島県ではナマシトギが多かったということだろう。

粢用の糯米を作る田が粢田になるのだが、リスト＝アップしてみると役場の職員がてこずった様子がよく分かる。以下、角川地名大辞典46鹿児島県の小字一覧から拾い出したものを掲げる。

Ⅰ　粢田

(シトギデン)国分市福島・川内市城上
(ヒトッデン)姶良町三拾町・東町鷹巣
(ミトクデン)知覧町厚地
(ミトキデン)知覧町永里
(ルビなし)祁答院町藺牟田・宮之城町舟木・東郷町藤川・日吉町吉利・吹上町和田・末吉町深川・佐多町伊座敷
(仮名書き)シトキデン＝輝北町諏訪原

Ⅱ　次米田

(ヒトッデン)姶良町北山・同下名・同寺師
(ルビなし)加治木町西別府・牧園町持松・福山町佳例川・末吉町諏訪方・蒲生町白男・樋脇町塔之原・宮之城町二渡
(ジメデン)鹿児島市川上

その他、粢木田(吹上町永吉)・次木田(末吉町岩崎)・米次(コメッグ、阿久根市鶴川内)・米次田(コメッギデン、薩摩町中津川)なども粢田の変化形と考えられる。

ヒトッデンは方言によるもの、ミトキデンはシ・ミの誤記、次米は粢を2字に分解したものと理解出来る。それにしてもこのように変幻自在な地名も珍しい。明治中期に市制町村制が施行され、土地台帳作成の過程で生じた混乱でもある。現在喧伝されている広域市町村合併ではこれらがそのままお蔵入りとなる可能性が大きい。将来が思いやられる。

上述の地名を白地図に落としてみると、A国分→佳例川→末吉、B国分→帖佐→蒲生→宮之城へと「粢田」地名が拡がったと判る。島嶼部および薩摩半島・大隅半島ともに海岸部には見られない。少々偏った分布になる。

国分高校在職中、粢田という名字の生徒がいた。今から考えると、その生徒を媒体として粢田がどのような耕作形態であったかを調べればよかったのにと、いささか後悔している。どのようなことでも興味・疑問を感じた時に調べなければ機会を失うことになる。それは「天が与えた時」なのだろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (5)

平田信芳

～栗屋田（くりやだ）～

時偶ぼやーっとテレビを見るのもよい。見ていて思いもかけないことに気付くことがある。昨年夏、拉致被害者曽我ひとみさんを中心にした番組があった。佐渡島には蘇我氏の血筋が残っていたのだなと考えるうちに、彼女が拉致された真野町の海岸が写し出された。真野町は、その昔佐渡国府があった所。権中納言日野資基が流され、隠若丸が父に逢うために忍び込んだのはこの浜辺からだったのかと回想した。写し出される画面に港らしい所がないことにも気付いた。やがて多祢国府推定地の一つ「真所八幡近辺」説の難点とされていた港(湊)がないことに想いは展開した。

すぐさま淡路・佐渡・隠岐・壱岐・対馬・種子島など独立島嶼に存在した国府所在地の立地・地名などの比較表を作成した。壱岐島だけが島の中央部だったが、他はすべて南部の水田地帯に立地していた。近くに八幡神社があり、一之坪などの条里地名があることも共通する。

現在「田」地名シリーズで車田・粢田・餅田などの「祭礼田」と取り組んでいるが、これも幸いした。祭礼田地名は種子島の場合南部に多く分布していることは分布図を見ると一目瞭然。大隅国府周辺・薩摩国府周辺にも祭礼田が多くみられることから、多祢国府所在地の推定と容易に結び付いた。一方、元禄15年(一七〇二)の国絵図・明治17年(一八八四)の20万分1図・昭和20年(一九四五)米軍撮影の航空写真を見比べて、南種子町中之下「里」地区が道路の結節点であったことを知った。

これらのことから南種子町教委文化財係に「里および真所」地区の5千分1図および小字復元図の提供を依頼した。送られて来た小字復元図に「栗屋田」があるのに驚いた。川内市御陵下町に「栗野ケ迫(くりやがさこ)」・「兵庫原(ひょうごばる)」という小字が隣り合っており、それが薩摩国府跡の決め手の一つとなったからである。

この栗屋田は『隼人文化11号』所収の藤井重寿氏蒐集の総字図では「西大屋田」、『南種子町郷土誌』では「西木屋田」、『角川日本地名大辞典46鹿児島県』では「栗屋田」とある。先日現地に出かけた。古老は「くりやだ」と答え、店では「うちの田がくりやだにある」と聞いた。これは厨田(くりやだ)に由来する。その隣に高田(こうだ、国府田?)もあった。栗屋田→西木屋田→西大屋田と文字が分割されて地名が化けることも知った。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (6)

平田信芳

～油田（あぶらでん・あぶらだ）～

油田。この文字を見て「油田(ゆでん)」を想起するのは地理学者・通産官僚・商社マン、「あぶらだ・あぶらでん」を想起するのが民俗学者・歴史家だろう。歴史家の発想は金もうけとは無縁のようだ。

灯りをつけましょボンボリに、お花をあげましょ桃の花。この優しい歌声で春の訪れを知るが、この歌の灯りはロウソクである。灯りの歴史を振り返ってみると、今回のテーマ「油田」はどういう所に位置するのか、ぼんやりとしてよく判らない。神社や寺院などが灯明用としてロウソクを購入する費用捻出の田を指したとは考えられない。多分、灯明皿で火をともすための油購入と結びつくのであろう。

江戸時代に灯明用として多用されたのは菜種油だが、菜の花や月は東に日は西にと見渡す限りの畑が油田に結びつくとは考えられない。中世までは小さな畑で、神社や寺院の灯明用に営々と荏胡麻(えごま)を栽培していたのであろう。

地名カードにある「油田」地名は次のとおりである。

アブラデン8例――高尾野町江内、栗野町田尾原、溝辺町竹子、大隅町岩川・大隅町中之内・大隅町月野・大隅町恒吉・大隅町大谷。

ゴユデン(御油田)2例――隼人町住吉・蒲生町漆。

アブラタ4例――頴娃町郡、姶良町豊留・姶良町三拾町、隼人町東郷。

よみ未確認12例――指宿市十二町、出水市上鯖渕、宮之城町舟木、祁答院町黒木、祁答院町上手、伊集院町恋之原、国分市新町・国分市湊、牧園町上中津川、横川町中ノ、鹿屋市白崎、志布志町帖。

絶対数も少なく読み未確認が半数では分布図を作成しても傾向をとらえることは出来ない。強いて言えば、天降川流域・菱田川流域、蒲生・祁答院に「油田」地名が多いと言える程度である。

今年はオリンピックの年。中国の応援は「加油」、日本は「頑張れ」。油を加えてハッスルせよ、頑固に意地を張り通せ。鹿児島弁の「キバレ」も気を張りつめてやり遂げよ。意味合いは頑張れと同一。加油の方が何となく愛敬がある。かつて国分高校で教えた生徒に油田さんがいた。アブラデンと呼んだら、アブラダですと生徒たちの視線は変な読み方をする歴史の教師だと言わんばかりであった。アブラデンが古いのだが。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (7)

平田信芳

～小田と大田～

小田。大半はオダだが、コダも若干ある。その区別は判然としない。地名カードを見ると「小田」地名は193例。内訳は小田61・〇〇小田115・小田〇〇17になる。そのうちの約半数96例が種子島にある。このことは何を意味するのか未解明。その他では笠沙町片浦・根占町辺田・佐多町辺塚・田代町麓・内之浦町南方・喜入町瀬々串・福山町佳例川など、大規模水田経営が考えられない土地に見られる。

「大田」地名は計51例。内訳は大田30・太田8・ウフタ（奄美方言）13になる。種子島は「大田」地名も比較的に多く11例21・6%、次いで川内川中流域の6例11・8%が目立つ。

米どころとして知られる伊佐盆地は大田が1例あるだけで、小田は皆無。鹿児島湾沿岸は東・西ともに「大田」地名は少なく、福山町に1例あるだけ。湾奥の天降川流域・綱掛川流域・別府川流域は四反田～一町田の名称をもつ中規模・大規模水田が多い地域であるが「大田」地名は見当たらない。

四反田～一町田を近世以降の開発による呼び名と考えると、大田は当然古代～中世の開発になる。但し奄美のウフタは近世の開発であり、その命名は時代をずらして考えなければならないだろう。

このように発生史的に考えると、小さな小田が古く、大きな大田は新しい。小田は個々の農民でも耕作出来るが、大田は豪族でなければ経営不可能であった。

現在は機械化農業の導入によって広い水田がもてはやされ、猫の額ほどの山田・棚田は休耕田となり草ぼうぼうの風景を現出している。当然農村人口は激減し、過疎化は進むばかり。それを胡麻化すために広域市町村合併が喧伝される。地方紙はそのお先棒を担いでいるとしか思えない記事を連日のように掲載。近頃は新聞を見るのも嫌になった。政治家たちは道州制が必然のように語るが、古代の薩摩・大隅がそれぞれ西海道の一州として、すべて太宰府の蔭になった苦い歴史があることをご存知ない。地方の荒廃はハイマート・ロス（故郷喪失）の人間を多く造り出す。愛郷心が根底からぐらついているのに、愛国心を教育基本法に盛り込もうとする世の中になった。

今やグローバル化時代。新しい歴史をつくるとイラク派遣の指揮官は述べたが、それは自衛隊の新しい歴史をつくる意味と受け取った。シベリア出兵では引き揚げ時期に苦しんだ歴史など中学・高校で習わなかったのだろう。小田・大田の比較でオダをあげるのが空しい。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (8)

平田信芳

～二反田・五反田・八反田～

二・五・八、一・四・七、三・六・九。このような数字の組合せは麻雀を楽しんだ者であれば知らない者はない。江戸時代後半に開発された田地には開田面積をよび名とした即物的地名が多い。県内に残るこれらの地名数を今回は楽しむことにする。

一町田46・九反田2・八反田47・七反田17・六反田56・五反田108・四反田39・三反田57・二反田58・一反田2。数量順に並べると五反田108・二反田58・三反田57・六反田56・八反田47・一町田46・四反田36・七反田17。江戸時代に麻雀を楽しんだ者はいないが、二・五・八の筋が多く、次いで三・六・九、一・四・七は少ない。一～三反田を小規模、四～六反田を中規模、七反～一町田を大規模開発とみなして地域別に整理してみた。一〇九メートル四方が一町、一反はその1／10で大体50メートル×20メートルの規模。「田一枚植えて眺める広さかな」は一反を指すので、五反田・八反田などは個人の手に成る開発ではない。

A　小規模開発が多く見られる地域

川内川中流域――大口・菱刈・宮之城

万之瀬川流域――川辺・加世田

日置郡――東市来・伊集院・伊作・田布施

鹿児島近在――郡山・小山田・吉田・川上

南薩――喜入・指宿・知覧・頴娃

B　中規模開発が多く見られる地域

川内川流域――東郷町を除く各地

万之瀬川流域――川辺・加世田・田布施

出水郡――高尾野・野田・阿久根市北部

鹿児島近在――吉田・谷山・原良

別府川流域――蒲生・帖佐・重富

天降川下流域――国分・隼人

菱田川上流域――市成・末吉

C　大規模開拓が多く見られる地域――海岸平野部、大・中河川下流域に多い。

出水郡(出水・野田・阿久根の海岸平野)、川内川下流域(川内)、大口盆地(大口)、神之川流域(伊集院)、永田川流域(谷山)、別府川下流域(姶良)、天降川下流域(国分・隼人)、肝属川下流域(串良・高山)

D　超大規模開発――千町田(垂水・高山)、九町田(川内・菱刈)、五町田(東串良)

E　開田面積地名なし

島嶼部――桜島・屋久島・三島・十島・奄美諸島は皆無。長島(六反田1・五反田2・三反田1)、甑島(五反田2)、種子島(六反田1・三反田2)は例外的存在・枕崎市・笠沙町・東郷町・溝辺町・霧島町・福山町・田代町・西之表市もこれらの地名は見当たらない。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (9)

平田信芳

～神田と寺田～

明治元年(一八六八)の神仏分離令にもとづいて、その翌年から廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた。維新のリーダーであった鹿児島では寺という寺はすべて廃絶の憂き目に遭った。爾来約一四〇年間、鹿児島の人々は古い仏教文化にうとい存在となった。他県を訪れた時、薩摩っぽの軽率とも云える気の早さにうしろめたいものを感じる。

また、この一四〇年間は激動の時代でもあった。前半の明治・大正・昭和の八〇年間は国家神道・皇国思想の下で世界を相手に戦い、叩きのめされ、国土の大半は焦土と化した。後半の六〇年間は戦後復興に生き甲斐を感じた時代だが、職を探せる都市にのみ人口が集中し、農村・漁村はさびれる一方。このアンバランスの辻褄合わせが今賑やかになって来た広域市町村合併。村の鎮守の神様は草ぼうぼうで傾いたまま。今の世の中は「神も仏もあるものか」がぴったり。情けない日本の姿を振り返って見ようと考えるのだろう。人々は足下の歴史に関心を示す。石のみの寺址やさびれた神社の境内に足を踏み入れると「神様と仏様はどちらが偉いのですか」と聞かれる。この問い掛けは信仰心のとまどいを端的に示している。

廃仏毀釈までは寺の方が経済的にも力があった。昔は神社と寺は表裏一体で、寺には必ず鎮守神があり、神社には別当寺が付いていた。どちらが都合がよいかによって神社または寺が表面に出たのである。神社と寺、どちらが「田」とより密接に結び付いていたかを県内の地名から考えてみた。

(神の類)宮田187(他に大宮田12・小宮田10・宮久田4)神田45、修理田14、山神田9、諏訪田9、権現田4、天神田3、田神田3、稲荷田2、山王田2。

(寺田の類)寺田66、経田(京田も含む)32、塚田17、堂田16、仏田7、鐘突田3、仏具田2、仏法田2。

数的には神田の類が多いが、こちらの耕作は祭礼の当番が担当するか、村人の奉仕で行なわれた。寺田の類は寺に従属した寺男、寺女の作業だったと見られる。また内容のよく判らない「門前」という存在があった。門前には寺付属の庶民(職工・商人など)が住み寺の財力を支えていた。近代化推進の財源に着目されたのが寺院の財産であり、中央集権国家の財産に取り込もうとしたのが廃仏毀釈であった。それが無謀と知ると対外進出に舵を切り、敗戦に至る歴史の道を歩んだのであった。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (10)

平田信芳

～門田と前田～

住居と水田との位置関係から田圃のよび名にいろいろな違いが出て来る。地名カードから位置による田のよび名を拾ってみた。以前、山田・迫田・川原田・平田など自然地形による立地の視点で眺めたことがあるが、今回は住居との関係にしぼった。以下がその主な地名数である。

前田422・脇田58・高田55・中田52・後田46・内田39・向田36・下田33・西田33・門田27・上田24・沖田14・東田14・南田13・北田12 etc

夕されば門田のいな葉おとずれて　あしのまろ屋に秋風ぞ吹く(大納言経信)と小倉百人一首にあることから、広辞苑は「門田＝門外にある田」と解説するが、他はほとんど説明がなく上田・内田・高田などは「姓氏の一」で片付ける。前田は百万石に敬意を表して加賀の前田家が著名とし、下田は幕末に開港した下田港との説明が付く。国語辞典での取り扱いは以上のようなもの。そこで地名や民俗を重点とする分野での取り扱いはどんなものかと眺めてみた。門田と前田は立項されているが他は顧られてもいない。門田と前田の解説を引用しておく。

門田(かどた)、①中世の荘園で豪族屋敷の周囲とくにその正面にあった水田。免田(税免除)であった〕地名用語語源辞典〔。

②屋敷の前に所有する水田。所有する家は旧家が多く、特別に大切にする。多くは苗代に用いられ、夏はずっとあけておくという。はじめは自作地であったが、しだいに小作地化された〕民俗地名語彙事典〔。

前田(まえだ)、①豪族や豪農が屋敷の前に持っている田、または神社・仏閣の前の田〕地名用語語源辞典〔。②前記①の説明に次のことが加わる。上田(じょうでん)。生産性の高い水田)で、そこで穫れたものを同族の祝いに使うとか、氏神の祭りにその米で赤飯を炊いたり餅を搗いて供える所が多い〕民俗地名語彙事典〔。

先に示した通り、前田という地名が特別に多い。そのことに結び付いて前田という名字も多い。鹿児島県の名字ランキングでは1位中村・2位山下・3位田中・4位前田である(拙著『地名が語る鹿児島の歴史』を参照されたい)。門田・前田は発生史から見ると先発投手型水田で、後田・横田・脇田などは後世に開発されたリリーフ投手型水田と位置付けられる。それはとも角としても、これらの地名が残る集落は歴史が古いと見てよい。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (11)

平田信芳

～小山田（おやまだ・こやまだ）～

中学時代、小山田先生から古文を習った。そのために鹿児島市小山田や加治木町小山田は当然「おやまだ」だと思っていた。地名辞典を引くと「こやまだ」とあり、驚いて全国的に「小山田」地名を眺めることにした。熊本県・大分県に小山（おやま）の地名があり、宮崎県・大分県に小山田（おやまだ）があるので、鹿児島県の「こやまだ」の読みに問題がありそうだと見当がついた。『日本地名総覧』（角川）を見ると、おやまだ15例・こやまだ6例。中でも西日本・九州は「おやまだ」地帯であり、鹿児島の「こやまだ」は特異な存在になる。何故、鹿児島だけが良かぶって「こやまだ」と読むのだろうか。

日本秋津島わづかに六十六か国は平家物語の表現だが、壱岐・対馬の二島を加えた六十八国体制は江戸時代も変らない。江戸時代の三百諸侯の中で薩隅日三州と琉球まで支配した鹿児島藩は特異な存在であり、藩庁の役人たちが広い藩内の地名をすべて掌握することは至難の技であった。他の大名たちの支配領域は大半が郡単位程度。これならば地名の読み違いが生じることもない。しかし鹿児島の役人たちは先輩たちが間違って読み仮名を付けたものも金科玉条として受け継ぎ、幕府の巡見使に説明しなければならなかった。「こやまだ」のルビは巡見使への提出資料に端を発していたのである。間違っているのにお上が決めたことを従順に受け止めて来た形だと判って来た。

小山田の池の堤に刺す楊成りも成らずも汝と二人はも（万葉集三四九二）。万葉仮名で「乎夜麻田」とあり、発生史的にも「こやまだ」はその足下にも及ばない。時代的に新しい「こやまだ」を発生が古そうに説明するのは無知をさらすことになりかねない。小（こ）が大手を振り始める時代は佐々木小次郎や片倉小十郎など強そうな名前が登場する戦国時代だと見ている。一方、お梅さん・おはなはん・およね婆さんなど庶民的女性の呼び名と違って、小梅・小菊・小袖・小雪など小股の切れあがった小粋な姐さんたちの姿から小（こ）が力を得て来たに違いない。

万葉集（8世紀半ば）・古今集（10世紀初め）・新古今集（13世紀初め）などの歌集、枕草子（11世紀初め）・平家物語（13世紀半ば）・太平記（14世紀後半）などの読み物等々、豊富な資料をもちながら国語学者も歴史家も広い視野で活用していないようだ。おこがましい話を小（お・こ）は訴えている。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (12)

～古歌に見える「田」～

平田信芳

万葉集・古今集・新古今集から「田」の熟語を拾い出して「古歌に見える田」と銘打つのは少々誇張ではないかとの思いもある。八代集・二十一代集に目を通してとなると、時間的・精神的ゆとりもないし、それに取組む根性もない。しかし万葉・古今・新古今の三集でまず骨組みを作ることの方が得策と判断した。骨組みを作り、見本として提示すれば、興味をもつ人が現われ、多数の人で手分けして八代集・二十一代集と取組む大仕事が可能になるかも知れない。いうなれば分業と協業による資本主義的生産様式の応用になる。ただし、これは実現の可能性を度外視しての話。

さて、A、普通名詞、B、固有名詞（主として地名）、C、田居・田子など（農作業関連）、に分類して話を進める。カッコ内の数は万葉集・古今集・新古今集の順に拾いあげた数値になる。

A類

秋の田（16・4・3）　山田（5・5・11）
早稲田（4・1・3）　小山田（3・1・2）
門田（2・0・1）　鹿猪田（2・0・0）
荒小田（0・1・2）　新田（2・0・0）
御田（1・0・1）
高田・新墾田・金門田・穂田・植田・打田・禁田――万葉集にのみ各1例。

B類

石田（5・0・1）　辟田（3・0・0）
松田（2・0・0）　六田（2・0・0）
小墾田（2・0・0）
池田・浮田・桜田・竹田・額田・佐野田――万葉集にのみ各1例。坂田・鳥羽田・長田・野田――新古今集にのみ各1例。

C類

田居（6・0・0）　田廬（1・0・0）
田子（0・0・4、うち3例は地名田子浦）

万葉集が最も種類が多い。奈良時代の人々には水田も身近な存在であった。田の脇にあった田廬（たぶせ）は奈良時代では歌に詠み込まれるほどの日常的な存在であった。金峰町田布施（たぶせ）の由来も当然その作業小屋に落着く。また松田・桜田・竹田・池田・坂田・長田・野田などの地名が見られることは、奈良時代以前にそのような呼び名の水田が出現していたことを物語る。

古今集には地名を詠み込んだ固有名詞の例はなく、普通名詞も山田・秋田・小山田・荒小田・早稲田に限定される。平安貴族は田園風景に冷淡であったのか、それともおごりか、貫之・定家の趣味か。少々気になるテーマだ。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (13)

平田信芳

～西田と尼寺田～

八・六水害から夢のようなうちに一昔が過ぎ去った。島津七十七万石の力を示した西田橋は石橋記念公園に納まった。西田町へ渡る所にあったから西田橋なのだが、公園に移された橋を西田橋と呼んでよいのか、池に架かる橋でもなく道路にも結びつかないものを橋と呼べるのか、私の頭の中は十年以上経っても未だに整理されない。その所在地を現在は浜町と呼んでいるが、私の記憶する地名は鶴江崎であり、春日町の範囲だった。いつの間にか行政サイドの都合で変更されている。西田橋撤去移設に際し、時の建設大臣が「平成の名橋を造ればよい」と語ったとか漏れ聞いたが、出来あがった西田橋は名橋と称する代物ではない。草牟田橋・護国橋の方がどっしりしている。庶民はだまされるのが世の常なのか？

さて、西田の由来を探るべく地名カードを眺めてみた。西田33・東田13・南田13・北田12。西田だけが突出している。考察し易いように地区ごとに数値を掲げてみた。カッコ内の数は上から順に東田・西田・南田・北田を示す。

鹿児島地区（0・2・2・0）4
指宿・川辺（0・2・2・0）4
日置地区（0・4・0・2）6
川内地区（1・3・0・1）5
出水地区（1・3・1・0）5
伊佐地区（0・3・0・0）3
国分姶良（1・2・1・1）5
垂水～佐多（0・2・1・0）3
鹿屋地区（4・1・0・4）9
肝属地区（1・4・0・0）5
曾於地区（3・2・1・2）8
種子・屋久（1・4・1・2）8
奄美地区（1・1・4・0）6

これらの地名は豪族屋敷を中心とした位置関係を示すものと考えられるが、71例中ペアと見られるものは鹿屋市川東の東田・西田、高山町野崎の東田・西田、輝北町市成の東田・西田、野田町上名の東田・西田の4組だけである。他はすべて相棒がいない。

鹿児島市の西田は相棒がいないばかりか、その由来に一考を要する史料がある。西田の初見は正平十二年（一三五七）文書の「にしたむら」とされるが、それより半世紀ばかり遡る応長元年（一三一一）の国分氏文書に「国分寺御領鹿児島尼寺田」と記したものがある。鹿児島市西田町の由来はこの「尼寺田」と見るのが、的を射ているのではないか。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (14)

平田信芳

～柳田・松田・柿田など～

「樹木名十田」を地名カードから拾ってみた。①柳田68・②榎田52・③松田32・④柿田22・⑤久木田12・⑥桑木田9・⑥桜田9・⑥竹田9・⑨楠田8・⑩梅木田7・⑪藤田6・⑫栗木田5・⑬梨木田4・⑭栃田3・⑭柚木田3・⑯椎木田2・⑯杉田2・⑯桃木田2。

最も数の多い柳田は平野部に多く見られるが、榎田以下はいわゆる里山の裾に見られ、山裾の田に名付けられた目印地名と考えられる。鹿児島駅の近くに柳町があり、西駅(鹿児島中央駅と名前が変ったが、百年前の武村の水田地帯のイメージが残存)近くに柳田通りがある。『樹の日本史』新人物往来社によると、天皇家は桜と橘、大伴氏は椿、藤原氏は柳を庭木としたとのこと。天皇家を真似るのは恐れ多い。大伴氏は没落した。多くの荘園を支配した藤原氏にあやかるべく、柳がもてはやされたのかも知れない。それらはとも角としても、しだれ柳に飛び付く蛙、たそがれ時に柳の下に現われる幽霊、柳の下のどじょうなど、柳と人々の結び付きは多い。

姶良町平松に差柳橋(さしやなぎばし)があり、その一帯の小字にもとづくと見られ、興味を持った。いかにも古そうな呼び名だ。『諏訪信仰の発生と展開』という本の中に水稲耕作の農耕儀礼として「苗代を作ってその周囲に柳の枝を立てる。柳の枝はすぐ根付くことから、苗が早く育ち、柳の枝が垂れるように米が沢山みのることを願う」差柳という民俗儀礼の解説があった。

次に松田32・竹田9・梅木田9。めでたい呼び名の松・竹・梅が少ないのは意外だった。松田は多いが、竹と梅は人家近くに植えられたために竹田・梅木田(梅田)が少ないのだろう。

秋の味覚を喜ぶ柿田22(うち柿木田14)・栗木田5(うち栗田2)・桃木田2をみると、桃栗三年柿八年といわれたことが判る。柿のみのりが最も楽しみにされたことを示す。柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺――地名の数からも成る程とうなづける。

最近本洲の各地でツキノワグマが人里に出現して生ごみをねらい、麻酔銃で眠らされている。柿を好物とするクマが里山の荒廃を教える世の中となった。大隅半島の山里では猿が芋畑を荒らしているらしい。そのうちに都会ではドブが消滅したことによる環境の変化でドブネズミが違った形で暴れ出すかも知れない。「自然に帰れ」――今は昔、世界史教科書の小見出しにあった。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (15)

平田信芳

～川原田～

野っ原や原野を開いたことで野田とか原田の呼び名が生まれたのかと考えて「野田と原田」をテーマとするつもりだった。まとまらず、仕様ことなしに自然の立地条件を考えさせる県内の地名を多い順に並べてみた。山田207・平田171・迫田147・浜田76・原田61・木場田53・野田24・島田10となる。ランキング通りに水田が開かれたとみられる。類例が多い地名はその由来が古いとの法則性さえ感じる。水利の面から眺めると、池田126・川田19・井手田5・沼田2となり、池田が突出している。他に深田50があるが、低湿地の開田は土木技術の発達が裏付けになり、近世以降に出現したと考えられる。

「野」は山の裾野や扇状地と考えられるが、「原」は少々とらえにくい。鹿児島県では笠野原・十三塚原・牧之原・春山原・紫原などシラス台地面を指す場合が多い。しかし海原の表現をあるし、木原・松原・萩原・荻原・草原・石原・砂原など、次々に単語を思い付く。そういう中で○○原田を拾ってみた。

川原田84・原田61・石原田23・桑原田8・小原田7・竹原田5・松原田4・中原田4・木原田2・梶原田・葦原田・砂原田・菅原田・茅原田・笹原田・草原田・切原田・内原田・永原田・平原田・灰原田・星原田など各1になる。

「豊葦原の千五百秋の瑞穂国」にしては葦原田が少ない。葦は悪(あ)しに連なるとみて吉原に云い替えたが、吉原通いも悪所通いとして消えてしまった。それらはとも角としても、○○原田の中では川原田が第一位になる。川原田は山田・平田・迫田に次いで開かれたとみられるが、雨期に冠水すること・葦の根が張っているなどの欠点が考えられる。それらをどのようにして克服したのか。

洪水で流路が変ったのに着目して新しい川に堤防を作り、古い流路には「古川」の名を与え、その周辺の川原を水田としたのではないだろうか。川内市・国分市・姶良町など広い水田が見られる地域に「古川」「川原田」という地名が数多く残っている。

葦・葭は古来葦垣・葦火・葦舟・ヨシズなど色々な形で人間の生活に役立てられて来た。最近では葦原は河川の水質浄化に役立つと見直されるようになった。「川原(河原)の枯れすすき」とぼやくことなく、古川と川原田を見直すことも必要だろう。自然には元の姿・本来の形に戻ろうとする摂理があることを忘れないためにも。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (16)

平田信芳

～羽田（はねだ）～

国内便の大半が羽田空港と結ばれているので羽田はよく知られている地名の一つである。しかしその由来となると各説各様であり、少々あやしげな解説も登場する。

『角川日本地名大辞典・13東京都』は①河口で海に接する地をハネというとの地形説、②半分のことをいう半田説、③海上から見ると鳥が羽を広げたように見えるとの地形説、④はに（赤土）に由来するとの土質説、⑤はりた（開墾地）の転化説、などを記す。

『地名用語語源辞典』東京堂出版は①ハネ（埴）・ダ（田）、②ハンダの転、③ハダの転もあるか、と記す。

山中襄太『地名語源辞典』は羽は埴（ハニ・ハネ）の当て字で粘土のこと、羽田・埴田は粘土質の田の意味とする。

鏡味完二『日本地名学』は、ハニは粘土の古語とする。

『民俗地名語彙事典』三一書房はハニは千葉県方言で赤土、ハネは奈良県方言で粘土のこと、ともに粘土状の赤土を意味するとし、上記の『日本地名学』にある分布状況を引用して古型のハニが近畿地方に集中し、ハネはその周縁の外圏をなすと説明する。

上記の各説から結論づけると、古代の埴輪（ハニワ）に結び付く赤土の表現であるハニ（埴）が後世辺境地帯で「ハネ」に発音が変化して「羽」の当て字が付けられたとみてよい。鹿児島県にはハニの地名がなく当然羽田（ハネタ・ハネダ）に落着く。その数は驚くなかれ、18か所もある。以下に列挙する。

羽田（ハネタ・ハネダ）　7例

鹿児島市小山田・阿久根市鶴川内・川内市五代・横川町下ノ・・吹上町花熟里・仝永吉・仝入来

羽子田（ハネタ）　4例

鹿児島市下福元・樋脇町塔之原・大崎町仮宿・輝北町市成

羽称田（ハネタ・ハネダ）　5例

大口市里・開聞町十町・川辺町田部田・伊集院町飯牟礼・市来町大里

羽根田（ハネダ）　1例――国分市広瀬

葉根田（ハネダ）　1例――頴娃町郡

昭和三四～三五年、川内市五代町羽田に間借りして住み、毎日羽田の田圃を眺めていたが特に赤い土とは感じなかった。新婚時代だったからかも知れない。それはとも角としても上記18か所のうち「里」の地名が3か所ある。里・羽田ともに古代に結び付く地名と考えられる。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (17)

平田信芳

～永田と長田～

長田は形状的に細長い田、永田は持主が永く栄えることを願う瑞祥地名と単純に割り切りたいのだが、書き手の先入観によって長田・永田が当てられる場合もあり、一筋縄ではいかない。古代の条里制度・班田収授法と結び付いた田圃の区画には長地(ながち)型と半折(はおり)型があることを高校日本史では教える。長地型の一反は一〇九メートル×十一メートルとなり、細長い田の表現が当てはまる。半折型の一反は約五四メートル×二十二メートルとなる。大隅国・薩摩国では半折型地割だったと考えられているので細長い田は少なかったとみられる長地型と半折型の違いは水利との関連だと思うが、農政学的実態は不明である。また最近では耕作機械の導入を前提に交換分合を進めて広い田にしているので。長地型・半折型を顧みることはない。

私の地名カードでは長田49・永田105で比率は1対2の割合になる。白地図に長田と永田を表示してみたが、その分布状況に特徴は見出せない。強いて言えば姶良郡・種子島・頴娃・金峰町は長田地区。川内川流域・肝属川流域・万之瀬川流域は永田が展開する。

本来は永田であることを示す地名例として永田原・永田平を眺めてみた。

永田原――阿久根市折口・仝脇本・大口市金波田・大浦町大浦・宮之城町虎居

永田平――阿久根市赤瀬川・加世田市津貫・指宿市東方・川内市楠元・垂水市中俣・大根占町神川・東市来町伊作田

長田平――鹿児島市小野

右に掲げたものでは長田は一例だけ。今ひとつ小永田と小長田を比較してみた。

小永田――鹿児島市皆与志・高尾町町柴引・串良町下小原・末吉町南之郷・仝岩崎・吹上町和田

小長田――頴娃町郡・仝御領・中種子町油久・輝北町上百引・伊集院町徳重・郡山町郡山・日吉町吉利・松元町上谷口

時代が下って登場する分割地名では小長田が多くなる。元々広い水田を確保出来なかった大隅国・薩摩国では細長い田圃よりも、その田の持主の繁栄を願う命名の方が土地柄として合っていたと考える。なお永田(えいでん)・長田(おさだ)と読む田があるとしたら、その由来は全く別なものになってしまう。頴稲田(えいとうでん)が永田に変化す例はないだろうが、長田(おさだ)は村長(むらおさ)の田を意味するので、その由来は異なったものになる。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (18)

平田信芳

～百田・千田・万田～

萬田久子、純日本的女優である。テレビ画像を見ていて、つくづく美人と感じる。万田とは？と考えて「日本地名総覧」を見ると、神奈川県平塚市・島根県平田市・熊本県荒尾市の3例がある。「日本地名索引」を見ると島根県今市・熊本県長洲・大分県中津・鹿児島県亀津の4例がある。無縁じゃないなと考え地名カードを引っ張り出した。「万田」地名18・「千田」地名12・「百田」地名21があった。以下列挙する。

万田――枕崎市東鹿籠・頴娃町別府・高尾野町上水流・名瀬市知名瀬・龍郷町芦徳・徳之島町花徳・大和村大和浜・仝志戸勘

九万田――国分市清水・松元町入佐

一万田――徳之島町下久志

屋万田――徳之島町亀津・仝母間

他に阿万田(名瀬市仲勝)・奥万田原(名瀬市浦上)・広万田(伊仙町中山)・玉万田(徳之島町母間)・万田袋(徳之島町轟木)がある。

仙田――開聞町・仝上野・知覧町永里

千田――祁答院町下手・下甑村片野浦・仝瀬々野浦・有明町野井倉・末吉町深川・住用村名原

他にセン田(笠利町須野)・千田代(東郷町南瀬)・千田山(吹上町中原)がある。

百田(ヒャクタ)――川内市平佐・吉松町中津川・東町鷹巣・財部町北俣・市来町大里・郡山町郡山・仝東俣・東市来町長里

百田(モモタ)――垂水市新域・姶良町西餅田・仝住吉

百田(ルビ未確認)――加世田市小湊・鶴田町柏原・末吉町二之方・松山町新橋・吹上町与倉・松元町入佐・鹿児島市小山田

三百田――根占町川北・伊集院町寺脇

「万田」地名の72％が奄美の島々にあり、とくに徳之島に集中している。千田・百田も分布図を作成してみると、千田(仙田)は南薩および甑島に集中し、百田は日置郡北部と姶良町に集中している。前記のように列挙してみると、これらの地名は福田・吉田などと同類の地名、すなわち多くの稔りを願った瑞祥地名とみなされる。狭い地味の痩せた土地に多く、稔りの願いを数字で示した表現で、万田が徳之島に千田が甑島にまとまっていることから発生史的には百田が古く万田は新しいとみてよい。昔は百万長者を羨んだが、今では億万長者。県・国の予算は億万でなく千兆単位になった。全く以て末世的、どこかでつまずくぞ。南無阿弥陀仏。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (19)

平田信芳

～新田（しんでん）～

新田。これを何と読むのかと考える人は少ないだろう。身近な地名からすぐさまイメージアップするに違いない。しかし地名を調べている者にとっては頭痛の種子。にいた・にいだ・にゅうた・にった・あらた・しんだ・しんでんのどれだか判らないからである。

私の地名カードにある県内の「新田」地名は一一九例。うちルビがあるのは、しんでん34・にった2・にた1・みいた1・しんだ1の39例。圧倒的に「しんでん」が多い。2／3はルビがないが多分「しんでん」だろう。江戸時代、新たに開拓した田に人々が喜びを感じたままの呼び名を付けたと考えるからである。

さて古来有名な川内の新田神社のよみは小字でないので前述の地名数に含めなかった。これの読みは「にった」が常識となっているが難問が一つ内包されている。中学一年の時に習った「買った（東日本）・買うた（西日本）」という音便の違いと同類の「にった（東日本）・にうた（にゅうた、西日本）」に抵触することである。

新田神社の神主さん達は祝詞では「にいた」と読むとのこと。そうすると「にいた」が最古系。それが「にった（東）」と「にうた（西）」に分かれたが、新田神社では古式に従っていた。明治以降、南朝の忠臣新田義貞の存在が注目されるようになると「にった」と読むのが常識になったのであろう。また東京が文化の中心になると、何でも東京の真似をしたがる鹿児島人の感覚から「にった」と読むようになったに違いない。

「にった」に振り回されて紙幅不足となった。江戸時代、藩内各地で営々と溜池・用水路・川筋直し・干拓などが行なわれて新田が造られた。脳裡に浮かぶものを列挙すると、剥岩池（溝辺）。中郷池（川内）・宮内用水路（隼人）・五万石溝（出水）・新川（国分・鹿児島）・長崎堤防（高江）・小村新田（国分）などがある。

二百～三百年ばかり前のご先祖様たちが鍬とモッコで造りあげた新田の大半が減反政策で藪と化している。食料自給率の低下と過疎化と併行し、しかも広域市町村合併・ローカル線切り捨てなども同時進行。国分市を例にあげると、肥後の石工岩永三五郎が来て指導した小村新田は初めのうちは塩田が主だったらしいが、それも戦前まで。今では塩田のおもかげは皆無。草やぶとなった小村新田のど真ん中を東回り自動車道が走っている。新田は読みだけでなくその用途も混乱している。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (20)

平田信芳

～平田と田平～

小説のモデルにされた時は平田を田平に置き換えられた。多くの人々から事あるたびに話しかけられ、長距離電話がかかって来たりだった。平田は「平(山裾の緩やかな傾斜面)に営まれた田・平たい田」と容易に理解できるが、田平はどのように考えればよいのか長い間悩みの一つだった。

「田」から派生した地名を県内に限って多い順に並べると、田平(74)・田原(70)・田中(58)・田尻(52)・田神(48)・田代(47)・田頭(36)・田上(30)・田畑(22)・田渕(17)・田島(16)・田崎(12)などが多い例になる。田平と田原以外はその解釈に苦しむような地名でないことに気付く。

たまたま三月の末、西南戦争の激戦地「田原坂」を訪れた。平日なのに田原坂は花見客で一杯だった。古戦場で花見とは幸福な人々だと羨しくなった。その時、羨しさと同時に、田原と原田・田平と平田の違いに想いをめぐらせた。それらの関係を眺めて行けばその相違が分析出来ると気付いた。

『日本地名索引』アポック社で地名の並びを眺めると、平田・原田は北海道を除いて全国的に見られるが、田平(たびら)と田原(たばる)は九州に限定される。田平と田原の相違点は田原(たはら)が本州にも見られることである。

このようにねらいが定まると、県内の「平田」地名・「田原」地名の分布図を作成すれば分析は前進する。私の地名カードにある県内の地名数は次の通りになる。

平田191(平田171・○平田20)
田平251(田平74・○田平177)

○平田・○田平まで持ち出すと煩雑になるので、混り気なしの平田・田平で比較する。平田171のうち奄美諸島が21例・12.3%、田平74のうち奄美諸島が6例・8.1%と目立つのが特徴の一つ。全体的に見ると、平田は川内川流域・肝付川流域・別府川流域など肥沃な水田地帯に多く見られる。これに対して田平は坊津町・開聞町・佐多町・鹿屋市の海岸部・垂水市牛根地区など、平地の少ない所に集中している。このことは田平が「田のある平」を指した呼び名であることを示している。

水稲耕作は田平から始まり、平田へ拡まったことを地名が示している。さらに田平・田原が九州に限定されていることは、九州から本州へ稲作が拡まって行ったことを物語る。平田・田平は気安く置き換えられない意味を秘めていた。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (21)

平田信芳

～ 田口と田尻 ～

「食う」ことには動物すべて目の色が変る。人間も例外ではない。わが子の時は気付かなかったが、食べ物の味を覚え始めた生後十か月の孫の様子を見ていると、なるほどと思う。昔の人々は食物とのかかわりから物事の始めと終りを「口と尻」に当てはめて表現した。地名には口と尻が付くものが多い。地名カードを見たら田口(6)に対して田尻(53)。バランスのとれた数を予想していたので意外だった。「口・尻」をテーマにしたカードを作成していないので『日本地名索引』にもとづいて全国的な傾向を眺めることにした。

A型 「口」優位型

山口120・山尻2　川口85・川尻45
谷口39・谷尻16　溝口18・清尻2
原口17・原尻4　坂口11・坂尻3
浜口2・浜尻1

樋口27・樋尻0　堀口7・堀尻0
穴口4・穴尻0　風口1・風尻0

B型 「口・尻」調和型

野口42・野尻40　江口16・江尻12
水口15・水尻11　沢口9・沢尻7

C型 「尻」やや優位型

田口40・田尻50　井口10・井尻12

D型 「尻」優位型

池口3・池尻22　沼口1・沼尻7
島口1・島尻6
入口3・出口20

さて「口と尻」とに分ける起点を考えると、命名者である人々の生活の場から眺めての呼び名であったに違いないと気付く。そこで目立つものから考えてみる。山の場合、山の入口が山神の立入許可を得る大事な場所になる。山尻すなわち山の後のことは山の彼方の空遠き存在としておけばよい。川口と川尻は地図で見ると、どちらも河口に付けられている。下流の住人から見れば川口だが、上流の人間から見れば川尻になる。上流・下流のどちらが有力であったかによって、川口・川尻の名が決まったに違いない。樋口は樋や筧から水が出て来る所。尻に口を当てがって水を飲むわけにはいくまい。

田口・田尻は井口・井尻と共にバランスのとれた数で、やや「尻」が優位・この程度ならば尻に敷かれた方がよい。集落の有力者の家に近い所が田口、遠い所が田尻だったのだろう。数の多い庶民は田尻・井尻の方で気楽に暮らしたに違いない。「田」地名の話は田尻で尻をぬぐうことにする。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (22)

平田信芳

～ 麻畑・浅畑・朝畑 ～

浅田は深田の反対語だろう。しかし多く見られる地名ではない。地名カードでは深田50例に対して浅田(徳之島町尾母)・麻田(中種子町坂井)の2例である。麻田の場合は麻の栽培と関係があったのかも知れない。「畑・畠」になると類例が増える。

麻畑―坊津町久志アサバタケ・東市来町湯田アサハタ・加世田市武田・頴娃町郡・根占町川南

麻畠―喜入町生見アサバタケ・市来町川上アサハタ・日吉町日置アサハタ

浅畠―指宿市池田・中種子町野間

浅畑―東市来町伊作田アサハタ・西之表市安城

朝畑―大口市曽木アサバタケ・薩摩町永野アサバタケ・祁答院町藺牟田・宮之城町虎居

読みはアサバタケもしくはアサハタ。すべて麻の植栽地名とみられる。最近では大麻の所持は没収・処罰が常識だが、麻酔・麻薬などの表現を見ると早くから医薬品として用いられていたと想像出来る。麻酔の注射がなければ歯の治療や外科手術などはとてもじゃないが安心して身をまかすことは出来ない。

昔、麻裃の着用は武士の特権を示すものであった。また三・四十年前までは蚊帳がなければ夏は安眠出来なかった。今では電気蚊取やアースジェットなどの普及で蚊帳はどこにしまい込まれたのかも判然としない。

麻畑の考察を進めるために『草木名彙辞典』で麻を調べてみた。「クワ科の一年草・古名、麻そ・麻を・苧を。別名、13種(省略)。漢名、大麻。三草(麻・藍・紅花)の一」とあった。藍・紅花は今でも徳島県・山形県の特産品として知られているが、時の流れは麻を消してしまったようだ。

用途が同じものに苧を・苧麻ちょまと呼ばれるイラクサ科の多年草(自生・栽培)があることも『草木名彙辞典』で知った。幸いなことに地名カードに4例あった。

麻苧畑―加世田市川畑・仝内山田

苧畑―加世田市地頭所・国分市郡田

苧・苧麻は「からむし」と呼ばれ魏志倭人伝にもその名が見えることから大陸渡来の繊維と想像出来る。それの発展したものが「しろたえ」だった。鰯草いわしぐさ・衣草ころもぐさ・ぽんぽんぐさなど21の別名があり、その一つに「白苧しらを」があった。鹿児島県独特の白男・白男川の地名・苗字の由来をなるほどと理解出来た。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (23)

平田信芳

～ 韓国で見た桑畑 ～

7月20日鹿児島を発ち韓国に出かけたが、22日夜から目が回り嘔吐を繰り返す熱中症となった。23日夜自宅に帰り着き安心してようやく熟睡することが出来た。翌24日近くの当番医院に運ばれて点滴を受けた。併行して血圧を測っていたが、後で聞くと180あったとのこと。今まで聞いたこともなかった数値に驚いた。血圧が上がると目が回ることを初めて体験した。30日に最後の点滴を終えたが文章を書ける状況でなく、8月1日頭のふらふら・もやもやを除く薬を処方してもらった。原稿用紙に向かうことが出来ると思った矢先、左足首を捻挫。同一日に二回診察を受ける破目に陥った。念のためのレントゲン撮影。骨折はなかったが、左足の甲は紫色に大きく腫れあがっていた。

釜山から南海高速道を通って珍島に赴き、海割れ道を見るツアーであったが、それよりも慶長の役で島津勢が戦った泗川・露梁がどのような風土であったかを車窓から確かめるのが私のねらいだった。田園風景は川内平野や国分平野とほとんど変ることがなく、違うなと思ったのは桑畑が多く見られたことである。今一つ韓国独特の景観は村はずれの丘の中腹に釣鐘形の墓域が多く見られることである。この形は古墳時代の日本に伝わり、応神陵・仁徳陵・履中陵周濠の形になっていることは以前述べた。今回この形は韓国女性の正装チマチョゴリのプロポーションとも一致することに気付いた。

多島海の海岸は遠浅で干満の差が激しく、潮の流れも速い。そのために海草類は豊富。旅行客の韓国土産は海苔・わかめ・真綿製品とのこと。韓国では農村・漁村に生業となるものがまだ現存していることを知ったのは一つの収穫だった。

泗川の戦の説明はなく、晋州の戦で朝鮮軍七万人が殺されたとのガイド。泗川国際空港をかばうためなのか。島津勢が三八、七一七の首級をあげた戦いが、それ以上の七万人と包括的に説明された。露梁の海戦は慶長の役最後の海戦と説明するが救国の英雄李舜臣が島津勢に撃たれたとはおくびにも出さなかった。それにひきかえ鳴梁の海戦で李舜臣率いる12隻の小舟が日本の水軍300隻を撃破したと繰返し説明していた。珍島大橋の直下が鳴梁の古戦場で壇ノ浦とよく似た景観だった。

県内に「桑」が付く地名は結構あるが生業と結び付かないので紹介は省く。多島海を見、熱中症に罹り日本水軍が敗れたのは成程と実感した。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (24)

平田信芳

～芋畑・胡麻畑～

畑は田に比べて地名の種類が少ない。田は古くから租税の対象とされ経済性も高かったが、畑で作られるものは種々雑多で特定の作物を冠するまでに至らなかったことによると考えられる。

地名カードから草本の栽培植物を拾いあげてみて改めて驚いた。前々回取りあげた麻畑がトップ、2番目は芋畑。これらがどこにあったかも紹介済みだ。以下、栽培地名の数は激減する。事はついでだ。列挙しておく。

胡麻畑――東市来町養母
胡摩畠――下甑村手打
芋　畑――根占町川南
尾芋畑――加世田市津貫
煙草畑――鹿児島市小野
西瓜畑――大浦町大浦
野稲畑――大口市渕辺
稗　畑――串木野市羽島

拍子抜けする程少ない。鹿児島県の畑作は単一作物栽培で収益をあげるものでなかったことをこれらの地名は物語る。から芋を作った後は菜種や麦を蒔いたのだろう。

一方、樹木の植栽による地名は桑畑および桑木畑(9)、梶畑(5)、加治木畑(2)、茶畑(4)で、桑畑が第一位。前回そのことに気付かずに韓国の桑畑を取りあげた。梶および加治木は和紙の原料となる梶・楮の栽培によるものと考える。船の舵木の場合も考えられるが、櫓や舵の用材を畑に植えるようなことはあり得ないだろう。茶の場合は茶園の形で登場することが多い。「園」を扱う時に触れることにする。

前回、日本の「桑」地名は生業に結び付いていないとのことで省略したが、樹木の植栽による地名では桑畑が第一位なので、敬意を表して掲げておく。

桑畑(5)――出水市武本・伊集院町の大字・金峰町浦之名・開聞町十町・末吉町岩崎
桑木畑(3)――宮之城町舟木・牧園町持松・大隅町大谷
桑波田(1)――鹿屋市下高隈

次に掲げる樹木を冠した地名は、栽培とは関係がなく側にある樹木を目印にしたものとみられる。これまた数多いものではない。

柿畑および柿木畑(9)・松木畑(4)・桃木畑(3)・梅木畑(2)・榎木畑(2)・柏畑(2)・楠畑(2)・梨木畑(2)・藤畑(2)

市町村合併で自治体名が変るが、民業を混乱させる官の感覚と思う。地名研究の立場からは余計なことをしてくれるの一言に尽きる。（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (25)

平田信芳

～ 平畑と迫畑 ～

日本人は昔から海の幸と山の幸に育てられて来たわけだが、畑で収穫されたものはどの分類になるのか。狩猟・漁撈の段階ではその区分がはっきりと分かれる。水産資源を確保するには森林を育てよといわれる現在、畑はとなると少々混乱させられるが、大地の恵みによっていることを考えると農作物は山の幸に属すると見るのが自然だろう。農作物を育てる「畑」を立地の違いで分類すると次のようになる。カッコ内は県内の地名数である。

A型 地形から見た分類

平田(24)・迫畑(20)・野畑(13)・山畑(11)
浜畑(9)・島畑(5)・原畑(4)・谷畑(4)

B型 水利から見た分類

川畑(46)・池畑(11)・水流畑(4)・堀畑(4)
溝畑(4)

畑は何よりもまず「川」に依存する度合が大きいことを川畑の数が示している。浜畑や島畑は畑作には不向き。昔からラッキョウ作りに向いていたとみられる。山畑も谷畑も数が少ない。水流畑・堀畑・溝畑も多くない。湿地の畑は里芋作りに適していたと想像出来る。野畑と原畑の差は面積の大小が開墾に適・不適を物語っている。

シラス地形を特色とする鹿児島県で畑地に向いていたのは「平」と「迫」になることを平畑・迫畑の地名数は示している。「平」はシラス台地縁辺部の緩傾斜部分でカライモ作りに適し、「迫」は侵食されたシラス低地部分で麦や菜種作りに適していたのだろう。平畑・迫畑は数の上でも大体似ている。上段に平畑という地名を、下段に迫畑という地名を市町村別に整理してみた。結論は北薩地方に多く見られる地名ということに落着いた。

平畑(市町村)		迫畑
鹿児島市	2	1
川内市	1	4
阿久根市	3	0
長島町	2	1
高尾野町	1	1
宮之城町	1	1
樋脇町	1	1

これらの中に県都鹿児島市がある。地形的に狭い所に鹿児島県の人口の1／3がひしめくことは一考も二考も必要だ。明治初年の鹿児島県の人口は約80万人、鹿児島市は約10万人だった。僅か百年の歳月が環境感覚を変え、水害の怖れを短絡的に石橋の所為にする。都市づくりに問題があることにお気付きでない。杉並区やニューオリンズに注目せよと地名は警告している。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (26)

平田信芳

～前畑・横畑・後畑～

月末を迎えるたびにテーマ設定に悩まされる。「畑」は田と異なり地名の数・種類が少なく、書くことを容易に見出せないからだ。考えあぐねた末、数の多い順に並べて見て、その結果考えることにした。以下地名カードにもとづく「畑」地名ランキングを掲示する。

前畑(75)・川畑(46)・畑田(44)・大畑(36)・長畑(34)・人名＋畑(27)・平畑(24)・中畑(21)・迫畑(20)・田畑(16)・麻畑(16)・上畑(15)・名字＋畑(15)・野畑(13)・横畑(11)・山畑(11)・池畑(11)・園畑(10)・浜畑(9)・東畑(9)・桑畑(8)・三角畑(8)・石畑(8)・当畑(8)・広畑(8)

の25通りが多い地名例になる。それ以下は省略する。地名例が少ないと考察しにくいからである。結果から見て今回は「前畑」をテーマにすることにした。次回以後もこれらの中からテーマが選ばれることになるだろう。

前畑・横畑・後畑の命名は屋敷の前・横・後にある畑に名付けられた呼び名と考えるのが自然の成り行きになる。前畑75・〇〇前畑13・横畑11・後畑7を白地図に落として眺めてみた。次のようなことが読みとれた。それを箇条書にする。

(1) 島嶼部に少ない――種子島・甑島・桜島は皆無。屋久島は前畑が1例、長島は後畑が1例見られる。奄美の島々については別途述べる。

(2) 川内川下流左岸に見られない――楠元に後畑が1例あるのみ。入来・樋脇・平佐・隈之城・高江・久見崎・寄田などは皆無。

(3) 薩摩半島・大隅半島でもそれらの地名が全然ない市町村がある。いずれも海に面したり山地に立地している。野田町・阿久根市・串木野市・大浦町・笠沙町・山川町・指宿市・根占町・大根占町・田代町・内之浦町・福山町・財部町・横川町などである。

(4) 奄美の島々にはほとんど見られないが、前畑が2例ある――大和村志戸勘と知名町上平川である。――大和村は「メエバタ」、知名町の場合は「メエバッテ」とルビがある。前(メエ)は共通しているが、バタとバッテの差違はどういうことなのだろうか。本土に近い方がヤマトことばを多く受け入れ、遠く離れるに従ってアマミンチュは独自性を保ったということか。地元の者でなければそれ以上のことは判らない。

近頃は市町村名を書くたびに腹が立って来る。地名にはそれぞれの歴史がしみ込んでいるのだが、市町村合併でそれがずたずたにされるからである。愛郷心・愛国心はどうなるのか。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (27)

平田信芳

～畠田と畑田～

「畑」の付く地名としては、畠田(25)・畑田(19)は類例が多い。両者の違いを明らかにするために「読みの違い」と「分布の違い」を眺めてみた。

畠田7例(ハタダ)――鹿児島市鴨池・同皆与志・東市来町養母・入来町浦之名・川内市東手・同麦之浦・高尾野町大久保

畠田11例(ハタケダ)――鹿児島市郡元・同小野・同伊敷・郡山町東俣・加世田市津貫・東郷町山田・高尾野町下水流・蒲生町久末・姶良町大山・大隅町岩川・輝北町市成

畠田5例(ルビなし)――加世田市内山田・大浦町大浦・吹上町田尻・祁答院町下手・鹿屋市打馬

畑田2例(ハタダ)――高尾野町江内・隼人町小田

畑田8例(ハタケダ)――加世田市津貫・薩摩町永野・東町鷹巣・同浦底・大口市平出水・姶良町木津志・末吉町諏訪方・大隅町月野

畑田9例(ルビナシ)――川辺町高田・笠沙町赤生木・串木野市上名・川内市草道・同城上・同田海・阿久根市脇本・菱刈町田中・鹿屋市花岡。

読みの上ではハタケダ19・ハタダ10。本来ハタケダと読んでいたものが省略されてハタダになったのであろう。畑で田作りを始めたことでの呼び名と見られる。

次に分布状態からの考察。薩摩半島は「畠田」が多い。相対的に鹿児島に近い所に分布し、甲突川流域は畠田が圧倒的地位を占める。ということは藩庁の目が届く所に弘まった表現との見当がつく。これに対して大隅半島では「畑田」が多く、概して鹿児島から比較的遠い所に多く見られる。種子島・屋久島・甑島などは畠田・畑田ともに見られない。薩摩半島・大隅半島共々海岸地帯には畠田・畑田がほとんど見られない。あっても少数である。畠田・畑田が共存するのは加世田の津貫だけだった。(新市で記載すると字数が合なくなる。悪しからず)。

用法の違いから眺めると次のようになる。

	畠6	畑12
麻バタケ		
桑バタケ	〃0	〃11
立地の差	〃0	〃15
植栽の差	〃1	〃20

以上の分析から「畑」は古くからの呼称、「畠」は時代的に新しい呼称と推定出来た。因みに漢和辞典は畠(国字。水気の少ない白く乾いた耕地)・畑(雑草や作物の茎を焼いて肥料とする)と解説する。地名はそれらを裏付ける資料として活用出来る。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (28)

平田信芳

～畑田と田畑～

前回は「畑田と畠田」を検討したが、今回は「畑田と田畑」の違いを考えることにする。田・畑・園シリーズ⑳で「平田と田平」を比較して水田耕作は田平から始まり平田へ拡まったこと、田平は九州だけに見られ九州から本州へ稲作が拡まったことが分析出来た。

二匹目のどじょうをねらったが「畑田と田畑」の場合どうもうまくいかない。同じ柳の下ではなかったようだ。平田と田平は「田」に焦点をしぼればよかった。畑田と畠田は畑と畠の違いを考えることで解決出来た。畑田(含畠田)と田畑は勝手が違う。

まず田畑の地名例を掲げよう。○○田畑まで含めると20例ある。うち田畠は1例だけである。ゴシック体で示した地名のルビを確認している。知覧町厚地だけがタバタケで、他はすべてタバタである。今一つ例外的なのが知名町正名の小田畑(オダバッテ)である。これは小田＋畑、すなわち小田の畑と理解すべきものかも知れない。

田畑⑭――出水市武本・指宿市十町・鹿屋市川東町・川内市西手・垂水市本城・**枕崎市西鹿籠**・**知覧町厚地**・**坊津町坊**・下甑村青瀬・伊集院町麦生田・金峰町池辺・名瀬市有屋・**笠利町喜瀬**・**与論町麦屋**

田ノ畑②――指宿市東方・加世田市唐仁原

○○田畑③――川辺町高田・**知名町正名**・**笠利町喜瀬**

大田畠①――末吉町深川

分布図を作成して把握出来たことは①畑田と田畑の分布は一致しない。②20例中薩摩半島南部に8例、奄美大島に5例見られるのが特徴的である。③畑田は大半が内陸部にあるが田畑は3分の2が海岸近くに存在する、などである。

奄美に畑田がなくすべてが田畑なので、そこに突破口がありそうな気がするが、現地を見ていないので論を進めることが出来ない。奄美の人々の教えを俟つことにする。また鹿児島県には田端の地名例は出て来ないので考える必要はないと思うが断定は出来ない。田端は青森・埼玉・東京・神奈川・長野・三重・長崎などの各県に見られる一般的な地名でもある。

NHKの紅白歌合戦を見るのも止めて書斎に引き籠って原稿用紙と相対したが、田が主体なのか畑が主体なのかの判断材料を見出せなかった。すべてがうまく行くとは限らないのが人生とあきらめることにする。地名例提示のみでお茶を濁す大晦日になりました。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (29)

平田信芳

～ 大畑と中畑と小畑 ～

大は小を兼ねる、大きいことはよいことだなどと調子のよい表現がある。それに対して小粒でもぴりっと辛いとか、中庸を心得よと戒められる。地名カードで「畑」の場合の大・中・小を見比べてみた。大畑36例・中畑20例・小畑9例で大・中・小の順になる。試みに分布図を作成してみると、意外な特色が出て来た。まず地名の所在を提示する。

大畑＝出水市上大川内・加世田市武田・鹿屋市野里・串木野市下名・同羽島・西之表市西之表・東町山門野・長島町平尾・同城川内・同下山門野・十島村口之島・大浦町大浦・大根占町馬場・南種子町島間・宮之城町時吉・伊集院町徳重・名瀬市有屋・同有良・宇検村湯湾・笠利町川上・瀬戸内町古志・竜郷町赤尾木・徳之島町手々

大畠＝出水市下大川内・川内市百次・西之表市住吉・東町鷹巣・野田町下名・吹上町中之里・金峰町宮崎・大根占町神川・十島村宝島・徳之島町母間・知名町久志検・与論町長嶺

中畑＝阿久根市脇本・大口市小木原・川内市草道・志布志町志布志・同内之倉・名瀬市大熊・同小湊・同西仲勝・古仁屋町伊須

中畠＝加世田市小湊・垂水市二川・西之表市伊関・同住吉・高尾野町大久保・中種子町増田・同坂井・知名町久志検

仲畑＝宇検村湯湾・住用村役勝・同東仲間

小畑＝鹿児島市山田・加世田市津貫・串木野市冠岳・蒲生町漆・喜入町中名・里村里・財部町下財部・伊集院町下谷口・西之表市安城

「畑」と「畠」は同一自治体で混同しないように書き分けた例が多く、差異はないと見てよい。「中」と「仲」は慣例的なもので、これも差異はないだろう。読みは大畑(オオハタ・オオバタケ・オバタケ・オオバッテ・オバッテ)、中畑(ナカハタ・ナカバタケ・ナアバッテ)、小畑(コハタ・コバタ・コバタケ)など変化に富んでいる。

以下、分布図で気付いたことを列挙する。

①長島に5例、十島村の口之島と宝島に「大畑」地名がある。小さな島の中で相対的に大畑と感じた呼び名とみられる。絶対的な基準によるものではないのだろう。

②大畑は薩摩半島西海岸に多く見られる。大隅半島は西海岸に3例、種子島も西海岸に3例見られるのが目立つ。東海岸にはない。

③奄美の島々に大畑が10／36例、中畑が8／20例、小畑が9例中ゼロになるのが特徴的。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (30)

平田信芳

～ 長畑と永畑 ～

中国やヨーロッパでは、ロバに鋤を引かせ、朝、東の端から出かけ、昼、西の端に着き、昼食・昼寝の後、夕方朝出かけた所に戻る耕作形態がある。小学生の時、赤い夕日の満州でそのような光景を見ていたので、世界史の教科書に出て来るヨーロッパ中世の荘園模式図に何らの痛痒も感じなかったが、その体験を話すと生徒たちは歴史の教師はすぐ大風呂敷を広げると云わんばかりの顔をしていた。広い世界を理解させるのは容易ではない。

シラス地形を基本とし狭小な耕作地が主体となる鹿児島県に長畑(23)・永畑(11)の地名例があるので、どのような地域にあるかを眺めてみた。まず所在地を列挙する。

長畑＝大口市牛尾・同原田・指宿市東方・山川町大山・頴娃町郡・同上別府・喜入町前之浜・同瀬々串・郡山町厚地・垂水市田神・同牛根麓・末吉町深川・同岩崎・佐多町辺塚・長島町城川内・下甑村青瀬・西之表市西之表・中種子町油久・南種子町西之・住用村役勝甲・古仁屋町油井・徳之島町手々・和泊町国頭

永畑＝加世田市小湊・東市来町伊作田・姶良町上名・同下名・横川町上ノ・輝北町市成・上甑村中野・下甑村手打・名瀬市小湊・同知名瀬・天城町西阿木名

読み、長畑は多様(ナガハタ・ナガバタ・ナガハタケ・ナガバタケ・ナガバテ・ナガバッテ)。永畑は(ナガハタ・ナガバタ)と単純明快である。分布は①喜入・指宿・山川・頴娃など南薩に多い。②種子島・甑島・長島・奄美諸島など島嶼部に多い。③陸の孤島といわれる佐多辺塚にみられる。

右に掲げた読み・分布から長畑・永畑は長大な耕地にもとづく呼称ではなく、外見的には狭く細長いが、先祖伝来の長い歴史をもつ畑で永い間家族の生活を支えてくれた畑の呼称だと理解出来る。「長」も「永」もながく栄えるようにとの願望をこめた命名と考えざるを得ない。瑞称地名の一種ではあるが、生活のにおいがにじみ出て何となく侘びしい。しかし反面、細々ながらも人々がもの静かに楽しく暮して来たことに結び付くと考えたら、頼り甲斐のあった畑になる。すべて物事は考えようだ。

この二世紀ばかりの間に世界的規模で人口の都市集中が進んでいる。人々の生活はすべて都市中心となり、農村・漁村はすたれつつある。例示した長畑・永畑の現状はどうなのか。それらを直視する必要を感じる。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (31)

平田信芳

～茶畑↑茶園↑土手茶～

去る二月二十日～二十三日、古代交通研究会長のK氏（元國學院大学教授）に同行、大口・菱刈・横川・牧園・溝辺・隼人・国分を歩き回った。最終日は八十四歳のK氏夫人も同行。K氏とは四十年来の交際だがフィールドワークに夫人が同行されたのは初めてのこと。溝辺台地茶畑のピクニックでもあった。

溝辺台地に着目したのは「天承二年（一一三二）往古の大路宮坂麓の石躰に八幡の御名顕現す」（石清水文書）の記事と「太宰府への行程が日向国、大隅国、薩摩国は上十二日・下六日」と延喜式に同一日数が記されていることからである。「往古の大路」は昔の駅路で十二世紀初めには断絶していたもの。大隅国から太宰府へ行くのに薩摩国・日向国を経由すれば行程日数が同一ではあり得ないので、大隅国から直接太宰府へ向かう駅路がなければならない。それが「往古の大路」と考えたのである。

石に「八幡」の文字が現われた所に石躰神社が建っている。大隅正八幡がそれを理由に八幡の本家だと主張して宇佐八幡との争いになった。宇佐の密使が大隅国に潜入し大隅正八幡宮に放火する事件となった。密使十三人が追手に討たれたのが、溝辺の十三塚の由来になる。

上記のことを踏まえ「十三塚」「大路」などの小字を地図上で辿り、大字の境界が直線的な部分を求めて現地を歩いた。石躰神社の前に「宮坂橋」がある。今回は宮坂を登らなかったが、志学館大学北側の道・旧隼人町と旧溝辺町の境界・チェコスロヴァキア村前の道・石峯集落（溝辺郷の旧麓）へと北上する九州縦貫自動車道と並行する古道の痕跡を見出した。中には近世にも道として使われた杉並木道もあった。全国の駅路を歩き回っているK氏のフィールドワークに教えられることが多かった。

現在溝辺台地の大部分は大規模な茶畑と化し、随所に風車が立ち並ぶ。風力発電によるポンプアップで散水するのでシラス台地が見事な茶畑に変身している。九州縦貫自動車道が出来る前、溝辺インターチェンジの所にプレハブを構えて事前調査に当った。茶畑が育ちつつあったが、多くはごぼう畑でその区画を示すものが土手茶と呼ばれる自家消費用の茶の木列。ごぼう畑は深掘りのため遺物は散乱していたが、土手茶の下から完全な土器が出土することが多かった。茶園という地名は多いが茶畑という地名はまだない。今はその変貌期である。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・終章

平田信芳

～流れゆく雲と水の流れ～

「朱欒」五月号が届いた。いつになく早いなと思ったら紙片が挟んである。左肺摘出手術のため入院です、と。周章狼狽しても始まらない。静かに成りゆきに身を任せる以外に方法はない。

花鳥風月を友とする人々の中で、ひたすら地名を題材としそれに秘められた歴史を知るべく雲水の心境になってエッセイを綴って来た。前回、溝辺十三塚原の台地に大隅国と太宰府を結ぶ古代駅路の痕跡を確かめ歩いたことを紹介した。その続きとなる数十年来追い求めて来た歴史家のロマンを述べて、病床に就く星浪氏を激励したい。

十世紀初めの「延喜式」に記されている駅家は大隅国が蒲生・大水の二駅、薩摩国が市来・英祢（あくね）・網津（おうづ）・田後（たじり）・櫟野（いちいの）・高来（たかく）の六駅である。すべて遺跡・遺構は未発見である。大隅国二駅のうち蒲生駅が蒲生町内にあったことは疑問の余地はなく、姶良町船津で古代官道（駅路）の遺構が確認されておりその延長に蒲生駅があったことは確実である。今一つの大水駅がどこにあったかを解明すれば大隅国の古代史は大きく飛躍する。

さて、雲の流れを見ると気象の変化を予知出来る。水の流れを見つめて鴨長明は人生の無常と閑居の楽しみを説いた。その向うを張る娑婆気など毛頭なく、目下歴史理解の基本となる「川由来考」を書きつつある。河川の略図を作成しながら川の名を追っているうちに「大水駅」を求める場所が見え始めた。男のロマンがそのベールを剝ぎとったと言ってよい。

大隅国府から太宰府への最短距離は大隅国府（府中）→宮坂麓→十三塚原→横川→曽木→小川内→肥後国経由の道になる。どこで川内川を渡ったか。それが最大のポイントだ。ヒントになるのは豊臣秀吉の島津征討後の帰路。平佐→楠元→山崎→鶴田→天堂ヶ尾（関白陣）→鳥神岡→平出水→小川内→上場→肥後国であった。古代の駅路も羽月川右岸を辿ったと考えられる。今一つのヒントは鹿児島県地誌が川内川の渡し場の名を二十か所記録していることだった。二十か所のほとんどが私渡船。小学校唱歌「村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさん」の延長そのもの。それらの中で官渡（公営の渡船）が二か所。曽木滝上流の下ノ木場渡と下殿渡である。この近くに大水駅を求めるべきというのが結論。「山は青きふるさと水は清きふるさと」それを見つめ直すのが愛国心の原点だと思う。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (32)

～「園」地名ランキング～

平田信芳

去る五月二十七日(土)、星浪氏なら海軍記念日を思い出すだろうと考え、南九州病院を訪れた。受付嬢、パソコンを操作して一昨日退院されましたという。ことはついでとバスを乗り継いで星浪氏宅に赴いた。意気盛んな様子に安堵したが、無理をさせてはならないと考えて七月号の原稿は作らなかった。六月二日、星浪氏より電話。地名カード整理の暇がなく間に合わないというと、来月は頼みますとなった。

数年前に「園」地名のカードは作成済みだが、どのように整理するかの構想は未着手。約束した手前、二日間かけて基本方針を練った。田や畑は長い歴史を経ても実体が見える。園は実像が見えない。田園はあまりにも全体的な景観である。茶園・ぶどう園・みかん園・公園・学園などを想起してみるが焦点が定まらない。大変な難問と気付く。

私自身、出身中学は鹿児島市上之園町にあった。妻の旧制は上薗。先輩や教え児に「園」が付く名字は多かった。身辺を見回してもこの調子だから県外で「園」が付く名字の人に出遭ったら鹿児島県出身と見てもよい。イントネーションその他の雰囲気から大体は当たる。まず「園」地名のランキングを掲げる。

1	園田	83	2	外園	82		
3	大園	64	4	上園	62		
5	中園	55	6	小園	55		
7	茶園	52	8	西園	38		
9	宮園	36	10	堂園	31		
11	下園	30	12	古園	27		
13	原園	22	14	久保園	19		
15	北園	18	16	寺園	15		
16	園山	15	18	前園	13		
18	内園	13	18	仮屋園	13		

(統計数は園・薗を区別していない。久保園には窪園も含まれる。)

近所にこれらの名字の人が必ず住んでいるはず。これら「園」の分析は歴史の変動に結びついている。奈良時代は口分田と共に園宅地を支給された。平安時代は貴族や社寺の私有地(荘園)が増えた。豪族たちは開墾した土地を貴族や社寺に寄進して荘園の番人となり武力を蓄え、院政時代に武家の棟梁が出現する。武士の世に移り、南九州では薗(園)と呼ばれる土地が課税単位となる。南北朝～戦国時代を経て「薗」は「門」に姿を変え農業生産を担った。庶民は大抵「門の名」を自分の名字とした。このような歴史の展開によって鹿児島県の「園」姓は多種多彩になった。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (33)

～薗・園・囿・苑～

平田信芳

国史大辞典は「薗」を項目として掲げその歴史的性格を説明する。地名カードを見ると圧倒的に「園」が多い。鹿児島県には独特な地名例として「囿」もある。これらの違いはどういうことなのか。それを考えるには頻度数と分布図の作成が先決になる。暇な隠居人が暇にまかせて暇なことをやり始めた。度数調べでは普通「正」を書いて数えるが、私はグローバルな記号「卍」を用いる。横書きすれば棒グラフの代わりになるからだ。分布図は数の多い「園」を青鉛筆、少ない「薗」は赤鉛筆、「囿・苑」は赤鉛筆で×印を付けることにした。

「園」地名＝944　「薗」地名＝197
「囿」地名＝11　「苑」地名＝2

「苑」を用いているのは旧有明町野井倉だけ。苑田・苑田前、上苑・上苑上・下苑下の五つの小字があるが苑田と上苑から派生した地名であり、地名の数としては2で処理した。数的処理はすべてそのようにしたので実際の小字数(土地台帳の)はそれよりも多い。

約千二百の地名を一々数え白地図上に点を記すわけだから、暇人が暇な時に暇なことをする作業になる。こんな作業が研究の基本になるのだが、馬鹿々々しい作業をして結果が出なければ方法論として失敗だったと脱帽するだけのこと。相当の日数を費したが結果は脱帽せずに済んだ。青鉛筆と赤鉛筆だけの二色のドット(点)は「万緑叢中の紅」を如実に示していた。「薗」を書いた所は村役人が几帳面な人物だった所、囿や苑を書くのは村役人が小才に長じて略字で処理する所だったと判断出来る。薗・園・囿・苑の内容・意味は全然変らないことを知り得た。

律儀な村役人が居た所を例示する。鹿児島近在の吉野村(古薗迫・古薗平・下古薗、海老薗・海老薗平、小薗、北薗、堂薗、神月薗、西ノ薗、仮屋薗、中薗、奥薗)、頴娃の御領(泊薗・泊薗下、相薗前・相薗下、川原薗・川原薗前、浦薗、奥薗、大薗前)。その他知覧の西元・同永里、川辺の山田・同永田、加世田の津貫、日吉の日置、東市来の伊作田、串木野の上名、川内の宮内、末吉の岩崎・同深川などである。「囿」を用いたのは宮之城の平川・時吉・久富木・求名などである。

分布図を見て気付くことは大隅半島では末吉と垂水が「薗」を多用するが、他は「園」がほとんど。「薗・園」地名が皆無だったのは栗野町だけ。理由は未解明。奄美は竜郷町安木屋場上ノ薗と宇検村田検和園の二例のみ。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (34)

平田信芳

～園　田～

園畑・園原・園平・園山などの用例から、園田も「園の田」、「園にある田」と理解出来る。地名カードにもとづいて園田の分布図を作成してみた。A密集地、B少数例地(少数だが園田がある地域)、C皆無地の三類型に分類出来る。

市町村合併によって自治体が激減しつつあるが、地名をもとに歴史を研究する上では昭和年代の自治体数が少ない指標の限度である。大字(江戸時代の村)単位で集計すると多くなりすぎる。多くもなく少なくもない分類指標になるのは江戸時代の行政単位であった「郷(麓)」になる。トカラや奄美諸島などは昭和の自治体を指標として分類するのが考察し易い。市町村合併は地名研究から見れば、百害あって一利なし。お役人たちは歴史を隠したがるようだ。

A型の地域

(1) 祁答院地方　13　(宮之城郷7、祁答院郷3、大村郷2、鶴田郷1)

(2) 現姶良町　9　(帖佐郷7、山田郷2)

(3) 川辺郷　8

(4) 加世田郷　7

(5) 伊集院郷　7

(6) 中種子村　5

B型の地域(左記以外31郷村を省略)

(1) 国分郷　3

(2) 北種子村　3、南種子村　2

C型の地域(57郷村＋トカラ・奄美)

喜入郷・今和泉郷・山川郷・頴娃郷・坊泊郷・久志秋目郷・加世田郷笠沙村・加世田郷赤生木村・加世田郷大浦村・阿多郷・日置郷永吉村・吉利郷・日置郷日置村・市来郷・郡山郷・百次郷・永利郷・中郷・東郷・水引郷・高城郷・野田郷・高尾野郷・出水郷・長島郷・入来郷・山崎郷・佐志郷・羽月郷・大口郷。(以下大隅国)本城郷・曽木郷・湯之尾郷・栗野郷・横川郷・日当山郷・溝辺郷・蒲生郷・重富郷・清水郷・福山郷・牛根郷・桜島郷・垂水郷・大根占郷・田代郷・鹿屋郷・姶良郷・大姶良郷・内之浦郷・財部郷・末吉郷・恒吉郷。(以下日向国)松山郷・大崎郷。

トカラ列島・奄美諸島も「園田」は皆無。

大隅国府所在地(国分郷)や薩摩国府所在地周辺(高城郷・水引郷)に「園田」が見られない。これは古代に成立したものでないことを示す・また、トカラ・奄美に見られないことは近世のものでもないことを示す。過密地域(A型の地域)が成長・発展する時期は鎌倉時代末とみなしてよいと考える。　(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (35)

平田信芳

～園山と村山～

ここ数年、あれやこれや調べる必要から一人で田舎道を歩くことが多い。農村も漁村も過疎化が進み、荒れた里山を見、減反政策で草ぼうぼうの水田を見て、世の中が狂い始めていると思う。荒れた水田を水田と言ってよいのか。荒れた水田に渡来植物セイタカアワダチソウがわが物顔にはびこっている。経済活動の動脈である線路がはずされて国鉄は解体、代替バスが走るから支障なしと説明したが、今ではバス会社が赤字路線廃止を申請する始末。高校生の通学をどのように考えるのか。教育基本法以前の問題だ。過疎化は高校の統廃合に波及し始めている。教育権の侵害に設置者の教育委員会が加担している。統廃合するのであれば教育環境整備の一手段として多くの公立高校に寄宿舎を完備せよと言いたい。日教組がだらしないので教師OBとして提言しておく。

さて今回は園山と里山を比較する心づもりでいた。地名カードを手にとって見ると「里山」という地名がない。止むを得ず「村山」と対比することにした。

園山(15)＝加世田市武田・加世田市唐仁原・串木野市冠岳・国分市下井・川内市山田・川内市寄田・高尾野町唐笠木・桜島町白浜・吉田町東佐多浦・笠沙町片浦・知覧町南別府・佐多町馬籠・下甑村手打・鶴田町神子・吹上町永吉

村山(7)＝鹿屋市川西・鹿屋市上野・山川町浜児ヶ水・南種子町島間・末吉町川深川・佐多町辺塚・桜島町小池

ゴシック体は大隅側(東目)、標準型は薩摩側(西目)の地名である。視覚的にグループが比較出来るように分けた。園山は大隅3に対して薩摩12、すなわち1／4。村山は大隅6に対して薩摩1、6／1の比率になる。

園山15例・村山7例という地名数の比較で両者の性格が判断できるとは、私自身が目をぱちくりさせられた。地名の由来を考えるのに、この方法は正攻法であると結果的に知った。園山も村山も集落共同体の共有地として成立するが、薩摩半島側と大隅半島側にタイプが分かれて存在することで新旧が判断出来る。園山の方が歴史的に古く中世の開発と結び付く。村山は開発がおくれた大隅の各地で面積的に広い範囲のものを人々が共有したことを物語り、近世の開発に結び付くと見てよいだろう。なお「里山」地名が公的地名としては皆無だったが、「園山」が現実的には里山として用いられていたと考える。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (36)

平田信芳

～小園と大園～

「園」は中世の武士たちが開拓した土地との見当が付いた。機械力を駆使できない時代は「小」の方が早く開ける。県内の小園55例・大園64例を次のように類型化してみた。

A 「小園」も「大園」もない。

1 阿久根市・高尾野町・樋脇町・市来町・笠沙町・坊津町・開聞町

2 国分市・隼人町・蒲生町・福山町・霧島町・財部町・大口市・菱刈町・吉松町・栗野町・志布志町・大根占町・田代町・佐多町

3 長島・甑島・桜島・屋久島・奄美諸島

B 「小園」だけが見られる。

1 入来町・東市来町・金峰町・大浦町

2 垂水市・加治木町・横川町・松山町・内之浦町・吾平町・根占町・南種子町

C 「大園」だけが見られる。

1 出水市・野田町・東郷町・郡山町

2 姶良町・東串良町・有明町

D 同一大字に「小園」「大園」がある。

1 川内市楠元・串木野市上名・指宿市西方・指宿市岩本・枕崎市東鹿籠・川辺町永田・吹上町入来・日吉町吉利・喜入町瀬々串

2 鹿屋市祓川・大崎町永吉・末吉町岩崎・末吉町諏訪方・溝辺町竹子・中種子町納官・中種子町田島

E その他。「小園」「大園」両方あるが、片一方が多い。字数の都合上省略。

上記の分類から考察できる大隅国・薩摩国の特色は次のようになる。

(1) 種子島を除き島嶼には「小園」「大園」は見られない。武士の力は大きくなかった。

(2) 大隅国府の周辺(国分市・隼人町・霧島町・福山町)に「小園」「大園」が見られない。これは大隅国府の勢力が近世まで維持されたことを示す(大隅国府の滅亡は大永七年=一五二七年である)。

大隅国北部(大口・菱刈・吉松・栗野)および大隅半島南端部(大根占・佐多・田代)にも見られない。大隅国府の勢力が根強く及んでいたのであろう。

(3) 薩摩国府の周辺(川内市)も多くない。若干見られる程度。大隅国府より滅亡が早いことを示す。

(4) 島津氏の最初の拠点(出水・野田・高尾野)も少ない(「園」の出現時期を示唆)

(5) 「小園」が多く見られるのは垂水・鹿屋の海岸部。「大園」が比較的多いのは谷山・喜入の海岸部と伊集院町・吹上町になる。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 (37)

平田信芳

～上園・中園・下園～

中園（なかぞの・なかのその）と下園（しもぞの・しものその）は鹿児島語の場合他に「の」が「ん」に変化する読み方が加わるが、上園の場合は「かみ・うえ・あげ」が加わるので類型化が複雑になる。地名の歴史的性格を考察する時は単純に「上園・中園・下園」の三種類に割切った方が早さばけになる。

県内を八地区に分けてこれらの地名の頻度を眺めてみた。単純な分類だが理解し易い数値が出て来た。

	鹿児島	南薩	北薩	姶良	肝属	曽於	種子屋久	奄美
上園		2	20	4	5	13	4	8	1
中園		3	20	11	1	6	5	9	
下園		18	4	1	1			6	
%		3.5	40.8	13.4	4.9	14.1	6.3	16.2	0.7

まず少ない列から片付けよう。

(1) 奄美には上ノ薗が一例（龍郷町安木屋場）があるだけ。

(2) 右に掲げた表に具体的に出て来ないが、中園がそれぞれ一例ずつある所も目立つ。しかもこれらには上園・下園もそばにない。

中　園――長島町指江、下甑村長浜、菱刈町市山中園村――三島村硫黄島

中ノ薗――屋久町尾之間

(3) 下園という地名は南薩地区と種子島に多い、一方、大隅半島全体では下園はほとんど見られない。

(4) 「園」地名の頻度が高い地域は中世以降開発が盛んだったと見てよい。ランクを付けると、①南薩40.8％、②種子島16.2％、③肝属14.1％、④北薩13.4％になる。

ただし北薩の中でも薩摩国府があった旧川内市は「園」地名が少ない。同様に大隅国府があった旧国分市および旧隼人町・加治木町・姶良町など奈良・平安時代に開発された地域に「園」地名が少ない。このことは大園・小園の分析でも同様で特徴的な実態になる。

(5) 南薩・種子島・肝属地区の「園」地名数は県下全体の七割近くを占める。ということは「上園・中園・下園」名字の大半はこれらの地域にそのルーツがあることを示す。

名字のほとんど（90～95％）は地名に由来する。地名が広域市町村合併によって不用意に消し去られて行く。とくに「郡」名などは不要との政治感覚があるようだ。それは歴史否定にもつながる。名字を消し去ることは考えられないだろう。名字と密接不可分の地名も大事にして欲しい。たかが地名と軽く見てはならない。たかが名字とは言えないはず。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 (38)

平田信芳

～内園と外園～

落日は釣瓶落としといわれる。老齢の域に入ってからの歳月も早い。またたく間に一年が過ぎる。しかもその大半は居眠り。寝る児は育つというが、老人は眠ることで脳力を回復すると割切っている。

「園」地名も数少なくなった。ランキング第2位の外園82例をテーマとして分析し始めたが何となくもの足りない。対照語の内園を眺めると13例。このアンバランスに驚いたが少数だと逆に例示し易い。

内園＝鹿児島市小山田、指宿市十二町
国分市重久、喜入町中名、川辺町古園、知覧町厚地、同町永里、高山町後田、中種子町増田
内薗＝喜入町生見、屋久町原、同町春牧、同町中間
大園・小園、上園・中園・下園の分布状況から見て「園」地名の分布は大体似通っている。内園の場合、「園」地名が島嶼部に少ないという原則に反して13例中4例が種子島・屋久島にある。節分の豆撒きは「福は内、鬼は外」の掛け声だが、外園はすべて「ほかぞの」と読む。「そとぞの」の地名例は聞いたことがない。内園と外園は一対の表現だが、コンビとなる地名例は僅か4例である。

喜入町中名＝内園と外薗山野
喜入町生見＝内薗と外薗
知覧町永里＝内園と外薗
高山町＝後田(内園)と前田(馬場外園)

前号と同様に県内八地区で眺めた「外園」の頻度を掲げる。

	鹿児島	南薩	北薩	姶良	肝属	曽於	種子屋久
外園	4	41	11	5	10	4	7
	%	%	%	%	%	%	%
	4.9	50.0	13.4	6.1	12.2	4.9	8.5

室町時代、伊作島津氏が支配した南薩地区渋谷一族が支配した川内川中・下流域、肝付氏が支配した肝属川上流域に「外園」が多く見られる。これらの地域にポテンシャル・エネルギーがあったことを示す。これらに比べて狭小な鹿児島地区に県人口の1／3が集中しているのは地政学的に将来性のないことを物語る。広大な肝属川流域・菱田川流域がさつま芋・大豆・小麦などの基本的農産物の生産地となることを目指せばサンフラワー号の志布志撤退など考えられない現象と思うのだが。黒豚・茶・うなぎ養殖だけでは這いあがれないだろう。原料を輸入に頼り、一瓶数万円の芋焼酎などは永続きしない。土着臭の強い庶民的な味が結局は愛される。

(鹿児島県地名研究会世話役)

人文地名・田と畑と園の巻 ㊴

平田信芳

～東園・西園・南園・北園～

「園」の立地について東西南北で眺めて見た。東南西北であれば麻雀に結び付く。麻雀は世界で一番面白い遊びだと云われる。中国人は複雑な遊びを考え付いたものだ。人生には遊びも必要だが、各人各様の遊び方があり、自分の遊びに他人を引きずり込むのは考え物だ。私は面白そうだと思ったものには熱中するタイプだが、ある程度マスターすると、性分に合うか合わないかを見定めて深入りすることはしない。酒飲みも同様で交際の手段として遊びも一応はこなす。学生時代に麻雀も覚えたが、メンバー不足の時につき合う程度だった。独身時代、下宿の老夫婦が麻雀好きで隣家のおばさんも加わっての土曜の夜の老人相手の麻雀は楽しかった。四時間ばかり、きれいな役作りを楽しみ勝ちもせず負けもしないで楽しんだからである。俳句を楽しむ方々には牌を掻き回し叩きつける遊びは不向きと思うので麻雀の話はこの辺までとする。

本題の地名分析に入る。私の地名カードには西園34・北園18・東園7・南園6が記されている。組合せは当然西園と東園、北園と南園に落着く。最も多い西園は南薩地方と中種子に多い。中世末期、南薩地方とくに万之瀬川下流域はのちに島津本家を継ぐことになる伊作島津氏が支配していた。中種子は野間氏の支配と結び付くのだろう。一方、古代以来早く開けていた川内川流域・天降川流域・別府川流域にはほとんど見られない。島嶼部も桜島・屋久島・甑島・長島・トカラの島々・奄美諸島には見られない。

集落の立地を考える上で役立つのは東園・西園というコンビの地名が同一大字にある例である。市来町大里と中種子町油久にそれぞれ小字東園と西園がある。本来の集落は山の南側にあり、その東側もしくは西側に園が形成されたと見るべきだろう。一つの園が東西に分裂した結果ではなさそうだ。

西園に次いで多いのは北園。これは海岸部または少々山深い地域に見られる。海岸部では南北に長い海岸線を持つ薩摩半島・大隅半島・種子島に見られる。本来の集落は東向きか西向きになり、新たな園は北園か南園と名付けられる。但し向きは本村と同じ。薩摩半島・大隅半島では南北に流れる川が多い。少々山深い地域を流れる川のほとりに成立する集落は東向きか西向きになるので、新たな園は位置的に北園か南園になる。

地名は自らの地形的立地について飾ることなくすなおに説明している。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 ㊵

平田信芳

～ 前園と後園 ～

「前や後や右・左」は五条大橋での牛若丸の動き。右京・左京の地名や右岸・左岸、右側・左側の表現はあるが、その他に右・左を冠した地名例はなさそうだ。右派と左派、右翼と左翼、右腕と左腕など対照的普通名詞はかなりある。前田や前畑は同一類型地名の中では共に一位を占めるが、前園・後園は地名例が少なく、いささかがっかり。前園13例、後園3例。列挙した上で考察することにする。

前園（6例）＝指宿市西方、同東方、西之表市住吉、高山町宮下、入来町副田、吹上町湯之浦。

前薗（2例）＝川内市宮内、山川町成川。

前ノ園（2例）＝国分市台明寺、頴娃町郡。

大前園（鹿児島市平川）、前園堀（東串良町川東）、前園ノ下（知覧町西元）。

後園（2例）＝指宿市十町、吹上町中原。

後園前（頴娃町別府）

これらを見つめてみても容易に特色を見出せない。気付いたことを馬鹿丁寧に箇条書する以外にない。テーマ選びを誤ったとほぞを噛みながら以下粗末な内容を列挙する。

①前園・後園という地名は薩摩半島南部に集中的に見られる。総数16例中10例が集中するだけでなく、後園の3例もすべて薩摩半島南部に存在する。海岸近くの狭い地形に由来するのだろうか。未解決のテーマである。

②川内市宮内、国分市台明寺（ダイミョウジ）、高山町宮下（ミヤゲ）など由緒ありげな土地に前園が見られる。有力な豪族屋形の前にあった「園」だったのだろう。なおこれらが薩摩川内市、霧島市、肝付町に自治体名が変ったことは知っているが、宮内、台明寺、宮下などの地名表記がどのようになったのか判らない。郵政公社民営化と相俟って平成大合併の細かい情報は一般庶民には伝わって来ない。お役人は「民は依らしむべし」と思っているのだろう。

③「薗」を用いた例は川内市宮内と山川町成川の2例だけ。「薗」は「園」に比べると時期的に新しいので「前園」が多いことからその登場は相対的に古いと見られる。

④「前園・前之園」姓は県内でよく見聞きするが、「後園」姓には出会わない。後園の出現は歴史的に新しいのだろう。

⑤島嶼部では西之表市住吉に前園があるだけ。いつ成立したのか手掛かりは未確認。

薩摩半島南部は開聞神社を中心とする土着の勢力が強かった所である。それとの関連が把握出来たらと思うが、まだ力及ばずである。

（鹿児島県地名研究会世話役）

人文地名・田と畑と園の巻 ㊶

平田信芳

～宮園と堂園～

明治はじめの神仏分離令にもとづき徹底した廃仏毀釈を断行したのが鹿児島藩だった。第28代藩主島津斉彬の遺志に添うものでもあり、国学者後醍院真柱（まはしら）や田中頼庸（よりつね）らが主張し、家老柱久武の名で藩内に命令された。この出来事を古い社会否定だったとする肯定的見解が有力で、宗教弾圧または文化破壊とする見方は少ない。世界史的感覚で見るとネロからディオクレティアヌスに至る間のキリスト教徒弾圧に匹敵するものであり、三武一宗の法難には対比されるものだろう。

すべての寺院が鹿児島藩から姿を消したが、幸いなことに江戸時代に存在した寺院の名は三国名勝国会に記録されており、また数多くの寺院関係地名も小字として残存しているの考察・分析は可能である。地名カードから宗教にかかわる「園」地名を拾いあげてみた。

（神社と結び付く「園」地名）

宮園　36、神園　16、諏訪園　7、

鎮守園・天神園各2

権現園・山王国・山神園・鳥居園　各1

（寺院と結び付く「園」地名）

堂園　35、寺園　15、塚園　2

正仏園・金剛園・大王国　各1

見ての通り数的に勢力伯仲である。これらの地名を地図上に記してみると、両者併存の地域は大浦町大浦・知覧町郡・末吉町諏訪方・三島村硫黄島だけであり、他はどちらかが卓越しているか、どちらも希薄な地域とに類別することが出来る。

A　神社関係地名優勢地域

吹上町・加世田市・指宿市・喜入町・

大隅町・輝北町

B　寺院関係地名優勢地域

鹿児島市・東市来町・日吉町・川辺町・

知覧町・串良町

C　神社・寺院地名ともに希薄な地域

出水市・野田町・川内市・樋脇町・

入来町・鶴田町・大口市・菱刈町・

栗野町・吉松町・横川町・溝辺町・

蒲生町・国分市・福山町・志布志町・

松山町・坊津町・頴娃町・開聞町・

桜島・長島・甑島・屋久島・奄美諸島

廃仏毀釈後、鹿児島県で異様に勢力を伸ばしたのは江戸時代禁教とされた一向宗（浄土真宗）だった。最近東京で若手研究者が西南戦争と宗教勢力を分析しているとのこと。真宗側は官軍に協力したことで勢力を拡大したが、薩軍に協力した神社は勢力不振になったと。地名とは無関係な話だが気になる。

（鹿児島県地名研究会世話役）